て国内では私有地・私有民を持つ強大な民族（蘇我・物部）の政権争いが激しくなり、朝鮮経営の失敗もあって国政は動揺し始めた。

六世紀の終わりごろ聖徳太子が出て新政を行った結果、内外とも治まったが、太子の死後蘇我一族の専横甚だしく国政は大いに乱れた。これを憤った中大兄皇子（後の天智天皇）は中臣鎌足らと謀ってこれを倒し、次いで六四六年政治の大改革つまり大化の改新が断行された。更に新政府は任那回復と百済救援のため大軍を派遣したが大敗した。これを白村江の戦いという。しかも戦後はその襲来に備えて筑紫・対島・壱岐に防人（軍人）と烽（のろし）を置いたり、筑紫に水城を造り、基山に基肆城を築くなど防備を怠らなかった。

文武天皇の時（七〇一）大宝律令（律とは今日の刑法、令とは今日の行政法、民法、訴訟法などに相当）が制定されて律令国家体制となった。国内には行政区域として新たに国や郡が設けられ、国には国司、郡には郡司が任命された。肥前国では大和町に国府が設けられ、国司が赴任して国内の行政に当たっている。八世紀になると中国文化の摂取が活発となり、遣唐使によって唐の文化、制度を取り入れて天平文化や律令国家の建設に大きな影響を与え、又仏教も盛んになった。肥前の国分寺が官寺として大和町に建立され、これに匹敵する規模と推定される大願寺の建立もこのころである。

都を奈良（平城京）から京都（平安京）へ移した七九四年から一一九一年までのおよそ四百年間が平安時代である。律令国家はなおしばらく続くが、律令体制下の過重な負担にあえぐ農民は浮浪、逃亡が

続出した。それが天災、飢饉も加わっていっそうひどくなった。しかるに一方、勢力のある貴族、豪族、寺社等は貧窮の民を利用して土地をふやし、私有化し、こうして律令国家の基盤である公地公民制は崩壊の一途をたどり、やがて土地荘園制へと変わっていった。

政界では、天皇親政から藤原摂関時代となり、十一世紀前半を中心の約七十年間はまさに摂関政治の全盛期であった。しかし、地方の政治は乱れ出し、国の軍事、警察権の無力化に伴い、自衛手段による武装化へと移行した。こうした小武士団が漸次大きく団結していった。こうして武士団の棟梁となったのが源氏や平氏である。この武士勢力は朝廷の治安政策に協力し、功績を挙げることによって政治的発言力を伸ばしていった。

一、大和時代

原始的小国家が次第に統合されていく中で、四世紀になると大和朝廷が日本の大部分を統一支配するようになる。この大和朝廷の支配体制は大化の改新後に見られるような強力な中央集権的なものではなく、地方豪族はそれまでと同様に人民と土地とを支配したまま、大和朝廷に服属する、いわゆる氏姓制度と呼ばれるものであった。大和朝廷は四世紀末朝鮮に出兵し、五世紀になると中国とも通交して、新しいすぐれた文化を吸収したので、政治・経済・文化はいっそう発展していった。

大和朝廷の成立及びその発展と密接な関係を持つのが古墳である。古墳が築造されていた時代を考古学上「古墳時代」というのである。古墳は三世紀末ないしは四世紀初めに畿内で発生し、七世紀ごろ（所によっては八世紀後半まで）までにかけて、皇室や豪族によって築かれたものである。

1　大和朝廷と郷土

中国では魏が約半世紀で晋に代り、間もなく周辺の諸民族が北シナに侵入して、やがて南北朝時代が始まった。このような東アジアの大きな変動の中で、満州を根拠地とした高句麗は北朝鮮に領土を広げ三一三年楽浪郡を滅ぼし、南朝鮮に住んでいた韓民族のあいだでも四世紀半ばごろ、馬韓の連合から百済、辰韓の連合から新羅が形成されるに至った。この間、倭人の社会がどのように進展していったかは、古事記や日本書紀の伝承（これらによると、九州日向（ひゅうが）の地を発して諸賊を平定し大和で即位した神武天皇、大和の神々を祭ってその地の支配を固め、四道将軍を派遣した崇神（すじん）天皇、熊そやえぞを征伐した日本武尊、新羅を討った神功皇后などの伝承がある。）があるだけではっきりしない。しかし遅くとも四世紀半ばごろまでには、現在の皇室の祖先を首長とする大和朝廷が、大和を中心に九州をも支配する大きな統一国家をつくり上げたと見られている。

大和朝廷は畿内から瀬戸内海、そして北九州沿岸部へ勢力を伸ばし、各地に割拠していた豪族たちを服属させて、その政治的支配下に組入れていった。そして大和朝廷は更に朝鮮の大邱付近にあった卓淳国と交渉を始め、この国を仲介者として、三六六年建国まもない百済との国交を実現し、三年後の三六九年には高句麗の圧迫に苦しむ百済の要請で、新羅進攻の兵を起こしてこれを撃ち、翌年にはまだ統一国家を実現していない弁韓の諸国を支配して「任那」と称し、朝鮮半島への足掛りを作って「日本府」を

置いた。大和朝廷のその後の朝鮮経略については、四世紀末から五世紀初めにかけて高句麗の王であった好太王（広開土王）の碑文が史料としてあげられることは前述した。この碑文には好太王の功業が約千八百字にわたってくわしく書かれているが、その中に辛卯の年（三九一）、日本は海を渡って百済・加羅・新羅を破り、これらを属国となし、日本はその後三回にわたって高句麗と戦ったと述べている。

大和朝廷のこのような朝鮮出兵ができるためには、その前提として国内統一がほぼ達成されておらなければならないことになる。大和朝廷は恐らく四世紀の半ばごろまでに、中部地方から北九州地方までの小国家を従えていたものと考えられる。朝鮮半島出兵と併行して、大和朝廷は南九州の熊襲や関東以北の蝦夷などを討って国土統一事業を強力に進めていったのが五世紀で、いわゆる倭の五王時代である。

五王というのは「宋書倭国伝」に見える「讃・珍・済・興・武」の五人で、日本の天皇の「仁徳（？）・反正（？）・允恭・安康・雄略に当たるという説がある。倭の五王は朝鮮における日本の立場を有利にするために南朝と通交し、特に宋にしばしば使いを送っているが、中でも武すなわち雄略天皇が四七八年に宋の順帝に上げた上表（君主に意見書を奉る文のこと）の中に、

「昔より祖禰（父祖）、みずから甲冑（よろいかぶと）をつらぬきて、山川を跋渉し、寧処に遑あらず（落ちついている暇もない）。東は毛人を征すること五十五国、西は衆夷を服すること六十六国、渡りて海北を平ぐること九十五国」

とあるが、毛人は蝦夷、衆夷は熊襲を指すものと考えられ、大和朝廷の勢力が東は関東、西は九州か

ら朝鮮南部まで及んでいたことを示すものである。一方、大和朝廷の国土統一事業や朝鮮出兵については記紀に説話として挙げられ、その一面を物語るものとされている。

佐賀県で最も古い畿内型古墳は、五世紀初頭に築成されたと推定される東松浦郡浜玉町の谷口古墳で、これに次ぐのが伊万里市の杢路寺古墳といわれる。このことからして、大和朝廷の朝鮮出兵が始まる前の四世紀中ごろまでには、唐津地方を中心とした玄海灘沿岸地域すなわち「魏志倭人伝」の末盧は大和朝廷に服属したものと考えられる。背振山地の南の佐賀平野も同じころかやや遅れて大和朝廷の支配下に置かれたらしく、佐賀市金立町の銚子塚や同久保泉町の熊本山舟形石棺墓は五世紀前半のものとされる。

木下之治氏によれば、大和朝廷は朝鮮出兵の最前線基地である唐津地方の沿岸地域を先ず確保し、その背後の佐賀平野を兵站基地と認め、筑紫より進出して佐賀地方までを四世紀中ごろまでに統一し、それから西には勢力を伸ばさず、小城以西の在地勢力と相い向かって立ち、五十年ほど遅れて統一したものと推定されている。

大和朝廷はその支配下に組入れた豪族たちを県主という地方官に任命したのであるが、九州で県や県主制が成立したのは四――五世紀に入ってからといわれている。県内では記紀や肥前風土記などに、佐嘉県を始め、嶺県主、松浦県、杵島県など四県の存在が知られる。佐嘉県は大和町を中心とする一帯に置かれたもので、佐嘉県主の祖先は弥生時代の佐嘉国の首長で、その地位は世襲され、大和朝廷の進出

に対して積極的に従属した形でその支配下に入り、五世紀ごろには県主に任命されたと考えられる。

六世紀になると、朝鮮をめぐる対外政策の行きづまりから、内治に専念する必要に迫られた大和朝廷は、支配機構の再編成と強化という見地から、県主に次いで国造制が成立すると共に、大和朝廷の直轄地としての屯倉を全国各地に設置した。屯倉は大和朝廷の財政的基礎であると共に、これを中心に地方行政の強化を図るものであった。安閑天皇は五五二年に九州地方に八つの屯倉を設置したが、火の国にも置かれており、皇后の春日山田皇女の名を後世に残すため、春日部屯倉と呼んだと伝えられている。

肥前風土記に

「肥前の国はもと肥後の国と合わせて一つの国たりき。」

とあり、現在の熊本県か佐賀県のいずれかに置かれたことになる。その所在地としては、熊本市春日町付近と推定する人が多いが、大和町の前身の一つである春日村の「春日」という地名、又川上村の東山田・西山田の「山田」という地名も春日山田皇女に由来するとも伝えられている。

屯倉というのは、当時の天皇が日本の各地に貢租を取るための支配地を設け、そこに屯倉という収納所を造り、屯倉首という役人を置いて管理させたといわれている。現在春日の神奈備山の麓にこの屯倉の跡と呼ばれる所があると伝えられているが、どこであるかは不明である。

国造が九州にあったと言われているのは筑紫・菟狭・火・阿蘇・碩田・豊の六国造で、佐嘉県は筑紫国造や火の国造の支配下に置かれたのであろうか。「国造本紀」によれば、県下では松津・末盧・葛津

立・竺志米多の四国造の存在が知られる。松津国は杵肆国、すなわち現在の基山・基里・田代地方、末盧国は唐津付近、葛津立国は藤津郡で鹿島市を中心とする地方、竺志米多国は風土記に出る三根郡米多郷で三養基郡上峰村から神埼郡三田川町にわたる地方とされている。これらの地方は、古墳文化の上からも、国造の存在が認められるといわれるが、船塚・小隈山古墳・築山古墳などの前方後円墳が、県下で最も濃密に分布する大和町を中心とする一帯に国造が置かれていないのは、佐嘉県主の存在を考え合わせても不可解なことである。

尼寺の西に「国尺」という地名が残っているが、文字そのままの読みから国造→国作→国尺と変わったものと思われ、この付近に国造の根拠地があったのではないかともいわれている。増田干信氏（内務省古跡調査員）は

「初め国府の置かれたのは、その国において最大の国造の有していた土地である。ここに国府があった以上、国造の古跡もまたこの地にあらねばならぬ。築山古墳は国造の墳墓に相違ない」

といっている。

六世紀の佐嘉は漠然としており、今後の調査研究に待つより外にないが、いずれにしても前方後円墳や著名な円墳のあることからして、県主ないしは国造に当たる支配者が存在していたのではなかろうか。

2、古墳時代と郷土

古墳というのは、土を小山のように高く盛り上げて築かれた古い墳墓、つまり高塚式古墳のことで、

単に古い墳墓という意味ではない。俗に「塚」とか「鬼の岩屋」と呼ばれているものがこれに当たる。

古墳が築成されていた時代を考古学上「古墳時代」と呼んでいて、歴史学的には大和朝廷成立の時代に当たっている。古墳は三世紀後半から四世紀初頭にかけて畿内に発生し、畿内から次第に地方に広まったといわれている。つまり、古墳は大和朝廷を形成する天皇や豪族の間に発生した墓制で、大和朝廷の勢力が地方に伸びるに伴って、各地の豪族に広まったと考えられている。古墳の発生については、大陸文化の影響を受けたことはいうまでもないが、弥生時代の墓制とどのように関連づけられるかは明らかでなく今後の研究に待つより外にない。

古墳が築造された当初は、支配者の「権威の誇示」的性格をもっていたが、次第にその本来の性格を失ない、「墓」としての方向をたどるようになり、後には家族墓的性格へと移行している。

古墳を造ることは大土木工事で「日本書紀」巻五に、孝霊天皇の皇女、倭迹迹日百襲媛命のハシ墓の築造状況が

「この墓は、日は人作り、夜は神作る。故、大阪山の石を運びて造る。則ち山より墓に至るまでに、人民相つぎて、たごしにして運ぶ。」

と記され、昼は多くの人民が手送りで大阪山の石を運び、夜は神が作ると考えられたほどに、古墳の築造には大変な労働力と時間を必要としたのである。

※日本で一番大きな前方後円墳は仁徳陵（にんとくりょう）で、主軸の長さ四百七十五メートル（大和町船塚

百十四メートル）、前方部、後円部、の高さ三十五メートルである。学者の計算によれば、この仁徳陵は天皇の生前に造営されたもので、これを造るためには、仮りに一立方メートルの土を一人で一日二百五十メートル運ぶものとすれば、延人員百四十万六千人の労働力が必要で一日に八千人が就労したとしても、四年近くの歳月を要するという。

古墳についての最初の記録としては、「魏志倭人伝」に邪馬台国の女王卑弥呼の死に際して「大いに冢を作る。径百余歩、殉葬する者奴婢百余人」と記されていることである。そしてこの古墳時代がいつ終わるかについては、地方によって一定してはいないが、火葬によって高塚としての形が薄れる七世紀前後であろうと考えられている。

古墳時代は古墳の外部形式、内部主体、副葬品等の特色から、一般に前期・中期・後期の三期とし、前期を四世紀、中期を五世紀、後期を六―七世紀に区分されている。

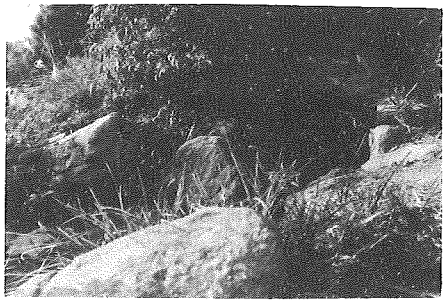
古墳はその外形によって円墳、方墳、前方後円墳の三種がその基本的なものであるが、このような高塚式墳墓の外に横穴や地下式墳墓などがある。

○ 前方後円墳

前方後円墳は日本独得の墳墓の形式で、文字のとおり前方部が方形で後円部が円形をなしているものである。この形からこの墳のことを銚子塚、茶臼山、瓢箪山、二子山などの名称で呼ばれている所もあり、今山の船塚も「ヒュウタンヅカ」といっている。この前方後円墳は古墳時代初頭から見られるが、どのようにして発生したかは明らかでない。方形になっている前方部は儀式をするためとか、祭壇として

作ったものとか（祭壇説）、丘陵の突端を利用して遺骸を埋葬するために自然に発生したもの（丘陵自然発生説）とか、いろいろの説があるが明確な解答はない。

前方後円墳の前期のものは、高い後円部の前面に細く低く前方部をそえた形の、いわゆる柄鏡式のもので、丘陵など自然の地形を利用したものが多い。中期のものは一般に壮大で、その代表的なものとして、応神天皇陵や仁徳天皇陵、大和町では船塚が挙げられるが、前方部の高さは後円部の高さに近くなり、又前方部の幅は後円部の直径と同じかやや長くなり、台地や平地に築かれ、周濠と呼ばれる広い濠を墳丘の周囲にめぐらすようになる。後期になると、前方部の幅と高さは共に後円部より増すようになるが、規模は縮少の方向をたどるようになる。



男女神社前の古墳

○ 円　墳

円墳は土饅頭形のもので最も多いが、前方後円墳ほどに外形の変化は見られない。前期や中期の円墳はその頂の部分が平らになった截頭円錘形をしているのに対して、後期のものは頂が狭く丸味を増し小形のものが多い。大和町の山麓地帯にある円墳はそのほとんどが後期のものである。

○ 古墳とその外部施設

古墳の外部には墳丘の土砂の流失を防ぐために「葺石」と称する小

石を置いている。又墳丘の上や周囲に素焼の土製品の埴輪が置かれた。埴輪は円筒埴輪と形象埴輪の二種があり、形象埴輪には家形埴輪、人物埴輪、動物埴輪、器材埴輪等がある。埴輪は「日本書紀」巻六に、垂仁天皇の皇后である日葉酢媛命がなくなられた時、野見宿禰の建案で殉死（追腹）する代わりとして作られたと記されているが、皇后の墓は四世紀中ごろ造られたもので、このころはまだ人や馬をかたどった埴輪は作られていないので、埴輪の起源にはならない。埴輪は古墳発生と同時に出現し、供献（おそなえ）の具として発生し、葬送の儀式のために造られたものと考えられる。この埴輪も後には次第に装飾的なものに変わっていった。このような葺石や埴輪などの外部施設を持った古墳は極めて少なく、古墳の大部分は何ら施設を有しない。

○ 古墳の構造と副葬品

古墳では死体を納めた棺や石室を内部主体と呼び、古墳内に納められている品物を副葬品という。

● 前期

木棺や箱式石棺を粘土で厚くおおって埋めるか、あるいは竪穴式石室を設けてそこに棺を納めた。竪穴式石室は墳丘を造ったあと、その頂に改めて土坑を掘り、その四壁に石を積み、上部から棺を入れて石材で天井をおおい、石室を閉鎖する構造である。

副葬品には、舶載鏡（中国で作られ日本に伝来された鏡）、玉類（勾玉・管玉）、碧玉製腕飾（鍬形石・車輪石・石釧）、鉄剣等の武器、鉄製の斧、鑓鉋（かんなの一種）、鎌などの農工具等がある。

● 中期

長持形石棺を竪穴式石室に置くか、又は石棺そのものを直接土中に埋める方法が典型的であるが、舟形石棺も採用され、北九州では大陸の影響を受けて、横穴式石室が現われるようになる。

副葬品には仿製鏡（中国で作った鏡を模造したもの）、鉄製の武器・武具・馬具等が多く見られ、石製品は滑石製の模造品が多量に副葬されるようになる。土器では弥生式の流れを汲む赤褐色素焼の土師器と共に、大陸から伝えられた新しい技術によって製作された灰色や灰黒色の須恵器（祝部式土器）が副葬されるようになる。

● 後期

横穴式石室が普及し、家形石棺や木棺をその中に納めるようになる。横穴式石室は死体を納める玄室とその通路に当たる羨道とからなり、竪穴式石室は上から蓋をしたのに対し、これは横に羨門と呼ぶ入り口を設けたものである。石室は扁平な割石を小口積みにする方式であったが、後には巨石を積み重ねる構造になる。横穴式石室は入口を石や粘土で閉鎖するが、開閉がたやすいので追葬が行われ、家族墓として利用された。又各地で横穴式の小円墳が一か所に群をなして築造されたのもこの時期で、須恵器が副葬品として多く見られ、北九州地方では大陸の影響で石棺や石室等にいろいろな文様や絵を彫刻したり又は彩色をした装飾古墳が盛んに造られるようになった。

(1) 大和町の前方後円墳

◎ 前隈山古墳（春日）

山頂に築造され、封土上には葺石が見られ、内部主体は竪穴式石室といわれるがはっきりしない。

小隈山古墳

◎ 築山古墳（尼寺東町）

春日小学校東方の平地に築かれており、封土上に葺石や埴輪が認められた。埴輪は円筒埴輪の外に鎧をかたどった器材埴輪の破片が発見されている。明治年間に盗掘され、その時に勾玉・管玉・直刀などが出土し、内部主体は横穴式石室といわれている。

昭和四十三年（一九六八）に築山一帯が尼寺の児童遊園地造成のため前方部がけずられ、前方後円墳の面影は見られない。

◎ 水上古墳（水上）

現在密柑畑になってその姿はないが、丘陵の先端に築かれ、前方部と後円部に石室がそれぞれあって、西側に羨道が設けられていた。封土上には葺石や円筒埴輪があり、土師器や須恵器の破片が散布していた。

◎ 小隈山古墳（小隈）

約六十メートルの独立丘陵の屋根に築かれているが、内部主体や副葬品は一切不明である。円筒埴輪の破片が多量に散布し、特に南面では広範囲にわたっていることから、埴輪は数段にわたって配列していたと考えられる。埴輪には渦巻文や菱形文などを線刻したものが発見されている。土師器や須恵器の破片が少し見られ、土師製の土鈴が採集された。

◎ 船塚（今山）（古代の扉写真）

山麓の低平な台地上に築造された県下最大の前方後円墳で（主軸の長さ百十四メートル）、墳丘は三段に築かれている。前方部などに葺石が見られ、墳丘の周囲には幅十二―十八メートルの周濠がある。又七つの陪塚が北から東にかけてあり、その一基から円筒埴輪が発見されている。内部主体や副葬品等については明らかでないが、後円部西側に盗掘の跡があり、話によると竪穴式石室で箱式石棺が二基置かれ、硬玉製の大勾玉が出土したという。なお、後円部頂上付近から倉庫をかたどった家形埴輪が出土している。船塚は中期の代表的古墳で、その築成の時期は五世紀後半といわれている。

◎ 男女神社西古墳（今山）

丘陵の屋根に築かれたもので、町内では最も小さいものである。内部主体や副葬品は明らかでなく、葺石や埴輪も発見されていない。

大和町前方後円墳一覧表（単位メートル）

古墳名	前方部の方向	葺石	埴輪	主軸	後円径	後円高	前方幅	前方高
風楽寺〃	西			40	22	4	30	1
道善寺〃	西			35	16	9	11	4
男女神社西古墳	西			22	14	2.5	10	1.5
船塚	南	○	○	114	63	10	62	9
小隈山〃	西		○	64	28	5	34	5
水上〃	南	○	○	35	17	4	16	2.5
築山〃	東	○	○	60	40	7	30	6
前隈山古墳	東			60				

はないかとも言われ、又周濠の痕跡も留めているようであるが、未調査ではっきりしたことはわかっていない。

(2) 大和町の主な円墳と石棺墓

⊙ 森の上古墳（野口）

野口礫石の敷山神社跡の南にあり、昭和十八年（一九四三）に発見された。封土ははっきりしないが、箱式石棺が約一・二メートルの高さに盛られた十八メートル平方の畠の中から発見された。石棺は南北の方向に置かれ、長さ二メートル、幅五十四センチ、高さ五十センチで、中に枕石が南

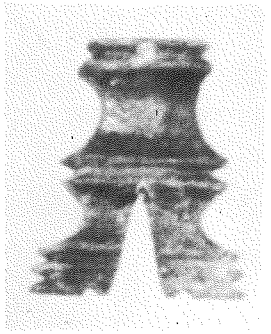
⊙ 風楽寺古墳

池上部落の東の水田中にあり、現在は共同墓地になっている。

⊙ 道善寺古墳

池上部落の中ほどにあり、前方部は低平で、後円部は竪穴式石室を有するもので

風楽寺古墳

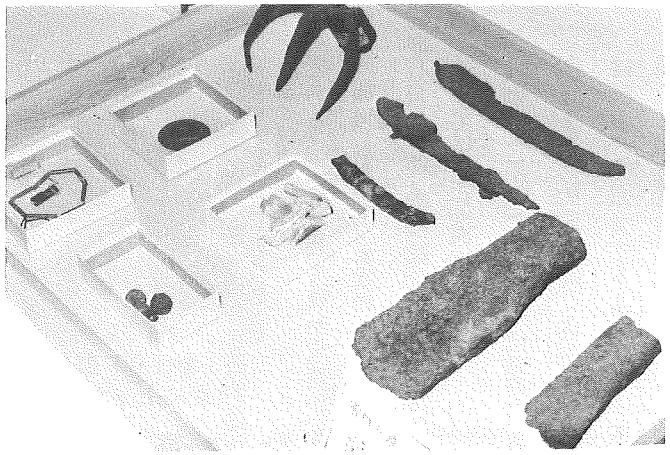


琴柱形石製品
（森の上古墳出土）

と北に置かれている。北枕には男性と見られる大形人骨と、琴柱形（琴の絃を支える琴柱に似た形）石製品及び竹櫛二、南枕には女性と見られる小形人骨と仿製の素縁帯変形文鏡と竹櫛八が発見され、その外に剣、刀子（短かい刀）、鍬先、鑓鉋が出土している。この古墳は合葬墳で、特に注目されるのは琴柱形石製品である。これは畿内の前期古墳から主として発見され、九州では唯一の出土例である。これは装身具か宝器か、その用途は明確でないが、ごく限られた人にのみ副葬され、大和朝廷へ服属した地方豪族の存在を物語るもので、五世紀後半に築成された中期の古墳とされている。琴柱形石製品と竹櫛は祐徳院博物館に陳列されている。

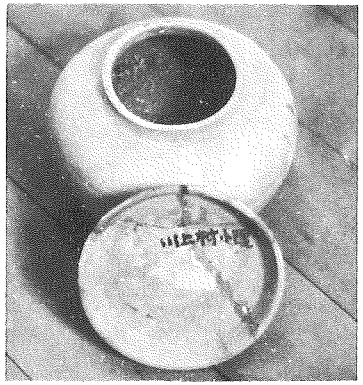
⊙ 高畠古墳（都渡城）

大正十一年（一九二二）に発見されたが今はなくなっている。封土の径約二十メートル、高さ約二・四メートルの円墳で、内部主体は小口積みの竪穴式石室である。主軸の方向はほぼ東西で、その中に長さ一・八メートル、幅七十五センチ、深さ八十四センチぐらいの箱式石棺があった。石棺の内部には両方とも東枕にした男女の仰臥伸展葬（おおむいて足を伸ばした）の形で合葬されており男が北側、女が南側であった。副葬品としては鹿角製刀装の直刀、石突五、登龍形剣、蕨手刀、刀子、鉄鏃五十などの武器類、鉄鍬、斧頭二、鎌、鑓鉋などの農工具、仿製内行花文六孤鏡、めのうの

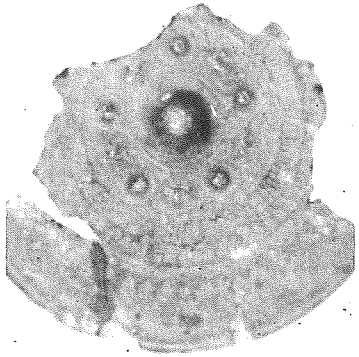


高畠古墳出土品（三本鍬・鎌二・斧二・蹴手刀子・銅鈴・紡錘車・鹿角製刀装・管玉）

礫石古墳群より出土した高坏



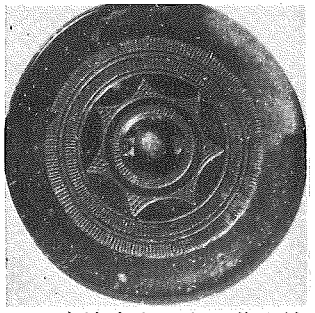
小隈より出土した骨つぼ（奈良時代）



仿製珠文鏡（野口より出土）

男女山古墳より出土したかめ（須恵器）

勾玉二、水晶玉二、細型碧玉製管玉三十二などの玉類、その外紡錘車（糸をつむぐ道具）や鈴四、鉄櫛、骨鏃十一などが出土している。この古墳は多量の鉄製の武器や農工具の出土が注目され、これらの副葬品から司祭者的な性格を持つ地方豪族の姿がうかがえ、中期の古墳と考えられる。



小隈古墳出土の内行花文鏡（県立博物館蔵）

⊙ 小隈古墳（小隈）

小隈山古墳の西南約八十メートルの所にあって、部落の人は「マル山」と呼んでいた。昭和三十三年（一九五八）土取り工事中に発見され、調査されたもので今はない。封土の径十八メートル、高さは北二・七メートル、南二メートルで、封土上には葺石が認められた。内部主体は封土のほぼ中央に四基の箱式石棺が不規則に置かれていたが、二基はすでに破壊されていた。石棺はいずれも二―三枚の板石を立てて側壁とし、前後は一枚の石をそれぞれ立てて囲み、上を数枚の板石でおおっている。石棺の長さは約一・八メートル前後、幅は四十センチ前後、高さ三十センチ前後である。床は礫床が一基で他は粘土床とし、内部には鉄丹が塗られていた。

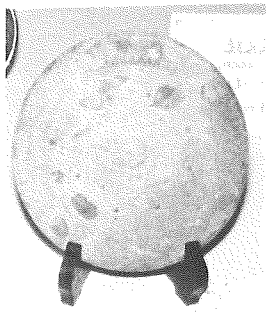
遺体は一体のものと二体のものとがあり、副葬品として一号棺から硬玉製勾玉二、碧玉製管玉が十、四号棺から碧玉製管玉と仿製の内行花文鏡が発見された。内行花文鏡は径一〇・四センチ、

七花文の質のよい白銅鏡で、文様もしっかりしており、仿製鏡としては県内では類例のない逸品である。この古墳の内部主体が四基である円墳であることから、家族墓的性格を持つ墓制への移行を示す五世紀後半の中期古墳として注目された。

⊙ 十三塚石棺墓（川上）

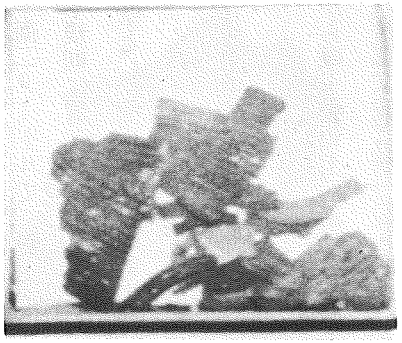
長さ約一・九五メートル、幅約三十六センチ、深さ約四十五センチの箱式石棺で昭和四十六年（一九七一）一月発見された。蓋の角の部分が孤状にけずられているので石棺の断面はかまぼこ形である。二体のさし合わせ埋葬で、中国製の方格規矩鏡（径一五・四センチで周縁には流雲文と鋸歯文とがめぐらされているが、石棺内の丹彩の付着と、ひどいさびのためにこの文様は明らかでない。中国の魏普ころの作になるものではなかろうか）と同じくきほう鏡の残欠が発見された。

この石棺の築造は古墳時代中期初頭と推定され、大和町の古墳としては古いものと考えられる。

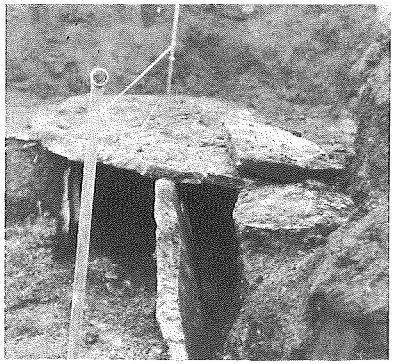


十三塚出土の方格規矩鏡
（祐徳博物館蔵）

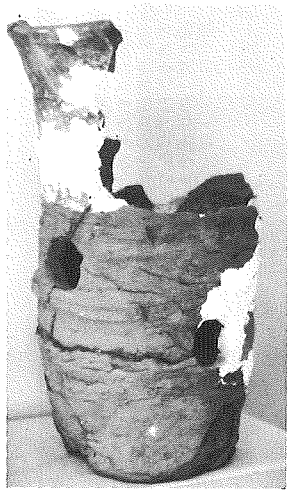
⊙ 男女神社西南円墳（今山）



森の上古墳出土の竹櫛（祐徳博物館蔵）



十三塚石棺墓



礫石古墳出土の円筒埴輪
（祐徳院博物館蔵）

小形の竪穴式石室の中から位至三公鏡が出土し、古墳時代中期の築造と考えられる。現在は密柑園となりその跡は見られない。

(3) 大和町の主な古墳群

⊙ 礫石古墳群（小川）

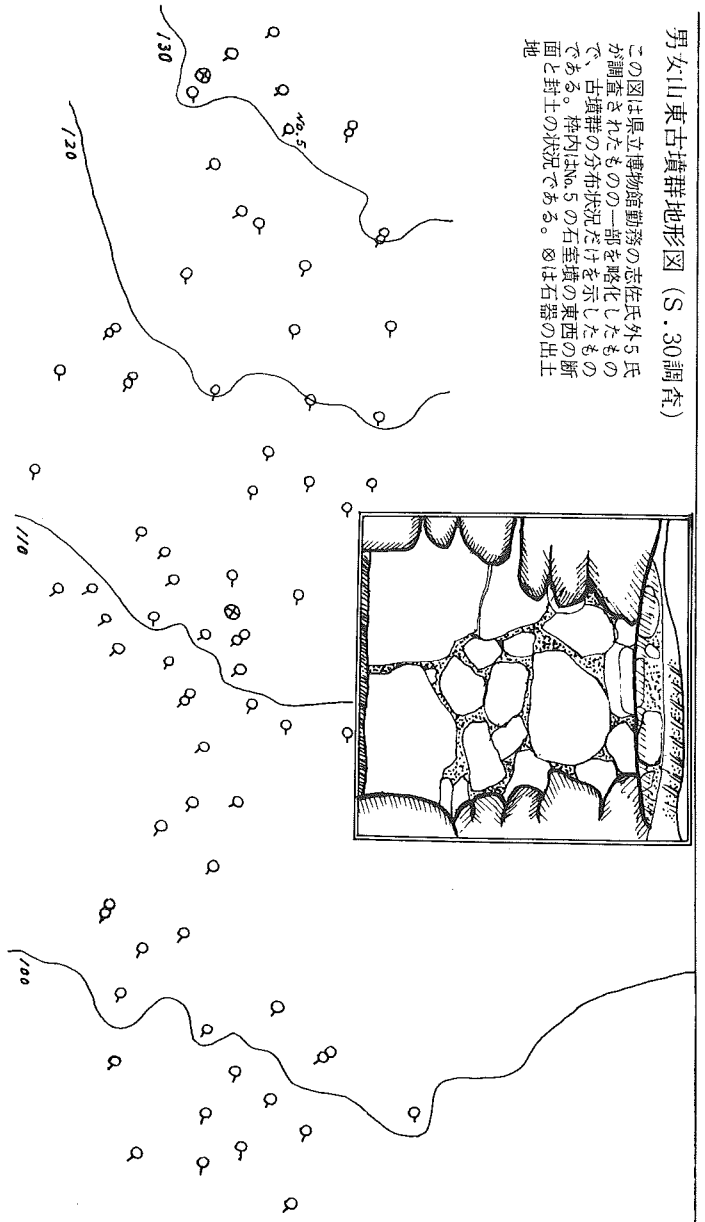
森の上古墳の北方に当たる段丘上に、横穴式石室の円墳が数十基あったが、密柑園造成のために今は見られない。四基の円墳に円筒埴輪、一基に馬形埴輪を配置していたことが、その破片の出土から確認された。この古墳群からは鉄刀、刀子、鉄鏃、鉸具（くつわ）、匂玉、管玉、小玉等が発見されている。

⊙ 男女神社東方古墳群（横馬場）

標高九十から百三十メートルくらいの丘陵上にあったが、今は見られない。ここでは六十七基の横穴式石室の小円墳が確認され、その中の八基は複室を持っていた。副葬品としては六獣鏡、管玉、鉄刀、刀子、鎌等が発見されている。封土上には須恵器を割って捨てたらしい跡が見られたので注目され、墓

男女山東古墳群地形図（S・30調査）

この図は県立博物館勤務の志佐氏外5氏が調査されたものの一部を略化したもので、古墳群の分布状況だけを示したものである。梓内はNo.5の石室墳の東西の断面と封土の状況である。⊗は石器の出土地



前祭が行われたのではないかと考えられる。ここから出土した甕（かめ）（須恵器）が祐徳院博物館に保管されている。

◎ 星熊山古墳群（川上）

巨石を使った横穴式古墳が四基確認されているが、いずれも盗掘されている。

◎ 野田山古墳群（今山）

密柑園造成のためなくなったが、竪穴式石室の古墳も含まれていたようで、円筒埴輪や馬形埴輪が発見されているが、副葬品は不明である。

(4) 大和町における古墳文化のまとめ

佐賀県内の古墳は大別して、有明海周辺と唐津・伊万里湾周辺との二つの大きな群となって分布しているようである。有明海周辺というのは、筑紫山地南面の山麓地帯を指し、中でも大和町では特に濃密に古墳が分布していた。

大正十二年（一九二三）の役場の調査によると、川上村二百二十四、春日村五、松梅村四となっているが、松尾禎作氏は川上村二百五十、春日村八十五、松梅村十と推定しており、大和町には当時約三百五十基の古墳が存在していたことになる。もち論これは大和町のみを挙げたのであるが、大和町の東方佐賀市の金立町、久保泉町の山麓地帯を含めるともっと多数の古墳が存在していたのである。大和町における古墳は、現在そのほとんどがなくなり数えるほどしか残っていない。

大和町における古墳時代の遺跡は、古墳の外に当時の人が使用していた土師器や須恵器などの破片が散布している住居跡又は集落跡と見られる所が、県道小城・神埼線の北側に特に著しく分布している。

昭和四十八年（一九七三）に実施した表面調査によると、大和町で六十か所ほどその散布地域が確認されているが、その中の五十箇所近くは嘉瀬川右岸の川上地区に存在している。そして弥生時代の遺跡が点であるのに対して、古墳時代の遺跡は線として分布している。このことは大和町の古墳時代における急激な集落の発達を物語るものとして注目される。

古墳時代の住居は船塚から出土した家形埴輪や奈良県の佐味田黄金塚から出土した仿製の家屋文鏡などによって、切妻造（一般に高床で一辺に三―四本の柱があり破風板が大きい柱数の多いのには上部にかつお木をのせたのもある）や入母屋造（屋根の形が切妻造でその軒場にひさしをめぐらした形式の発達したもの）の高床や平地式の建物と、前の時代に引き続き竪穴式住居や平地式住居が存在していたことが知られる。船塚出土の家形埴輪は切妻造で、屋根に網代（竹又は木をあん）をかぶせ、窓は一方に一つ、もう一方に二つあって、階段をつけたもので倉庫と推定されている。一般の人々は竪穴式住居に住んでいたことは確かで、大願寺南方では土師器や須恵器片を包含するその断面が確認されているので、これらの土器片の散布地域から当時の住居発見の可能性は十分あるといえる。竪穴式住居以外の建物は当時の支配者層が住んでいたものと考えられる。

大和町の古墳で注目すべきは、船塚を始めとして前方後円墳が、県下三十数基の約四分の一に当たる八基が存在することである。この前方後円墳は権威の象徴ともいうべきもので、これが築造されること

は支配者層がいたということを示すもので、大和朝廷に服属した地方豪族すなわち佐嘉県主やその一族の墳墓と推定されるのである。彼らは嘉瀬川扇状地を本拠地として政治を執り、これらの前方後円墳や著名な円墳を築造したものと考えられる。古墳を築造する優秀な技術と、高畠古墳等で見られるような鉄製農具を使って、嘉瀬川水系の整備を図ると共に、沖積平野の灌漑と農地の造成を進めたので、農耕地は飛躍的に拡大され、農業生産の増加を見、その豊かな富によってこれらの古墳は築造されたもので、佐賀平野という農耕生産地域を背景にして、古墳文化は育成されたものといえよう。

大和町の古墳は、五世紀から築造され始めたと考えられるが、円墳の大部分は内部主体が横穴式石室であることや副葬品から、古墳時代後期すなわち六―七世紀にかけて築造されたものであろう。又大和町に存在した古墳は、大和町に居住していた人に限定するものではなく、嘉瀬川水系の沖積平野に古墳がないことからして、同じ政治圏にあって平野部に居住していた家父長制的家族の墳墓が、特に後期の群集墳の中には含まれているものと考えるのが妥当ではないだろうか。

仏教の伝来については「日本書紀」欽明天皇十三年（五五二）の条に、百済の聖明王が使いをやって仏像・経巻を献じたという記事があるが、「上宮聖徳法王帝説」や「元興寺縁起」に伝える五三八年が正しいといわれている。この仏教をめぐって、蘇我稲目と物部尾輿との間に争いが起こったが、五八七年に蘇我馬子が物部守屋をたおしてから、仏教は国家の保護を受けて発展し、推古天皇の時に我が国で始めて仏教文化が開花したのである。これを飛鳥文化といっているが、時の摂政聖徳太子が大きな力になっ

たことはいうまでもない。このような中央における仏教文化の興隆は、地方に波及せずにはおかなかった。

大化二年（六四六）の薄葬令により、古墳の築造は漸次行われなくなったと推定され、古墳に代って寺院の造営が見られるようになる。「肥前国風土記」の佐嘉郡の条に「寺一所」とあるが、それに当たるのが大願寺廃寺跡とされ、その造営者はかつての佐嘉県主の後裔で、当時の佐嘉郡の郡司ではなかったかと考えられる。

仏教は一面において、厚葬から薄葬に変えたといえよう。すなわち、仏教と共に伝えられた火葬が、一部支配者層に採用されるようになるのである。火葬骨を入れた蔵骨器は小隈山の北方で二個発見されているが、この蔵骨器を納める墳墓は、これまでのような大きな古墳を必要としない。佐賀県では八世紀に築造された古墳もあるが、大和町では七世紀後半に古墳時代の終末を迎え、それまでの古墳築造に傾けた財力を、寺院の造営にまわしたのではなかろうかとも考えられるし、又そうしなければ、天平年間の初めごろ、方二町の寺域を持ったと推定される大願寺（廃寺跡）の建立は困難ではなかったろうか。

この時代の人々が自然の霊威や死に対して抱いていた観念は、依然として呪術的なものであったが、その方式や儀礼は次第に整えられた。「記紀」に記されている太占の法（獣骨を火に焼いて占う）、みそぎ（水の清浄な力によってけがれを除く）、はらい（種々の儀礼によって悪霊を退ける）などの習俗を始め、豊作を祈る春の祈年祭、収穫に感謝し次の豊作を祈る秋の新嘗祭などの農耕儀礼も発達し、神のための社を造ることもこのころから一般的となった。

二　飛鳥時代

概　説

飛鳥時代は六世紀の終わりから八世紀の初めごろまでのおよそ百年間をさしている。この時代は内憂外患の時期で、国内では北九州に筑紫国造磐井の反乱が起こり、中央では中臣氏、忌部氏、大伴氏、蘇我氏らの豪族が政治や軍事を分掌していたが、その勢いはしばしば天皇の勢いをしのぐほどで、大和朝廷の支配力はなお十分ではなかった。

六世紀にはいると聖徳太子が出て、十七條憲法、冠位十二階及び遣隋使の派遣などの新政が行われた結果内外ともよく治った。しかし太子の死後蘇我一族の専横甚だしく国政は大いに乱れた。これを憤った中大兄皇子（後の天智天皇）は中臣鎌足らと計って蘇我氏を倒し、ついで大化二年（六四六）政治の大改革を行った。いわゆる大化の改新である。更に中大兄皇子は天智二年（六六三）に任那回復と盟邦百済救援のため大軍を派遣したが、優勢な唐、新羅連合軍のためわが方は大敗をした。これを白村江の戦と呼んでいる。しかも戦後はその襲来に備えて防備を怠ることが出来ず、関西の要地に朝鮮式山城を築かせた。わが肥前の最東部基山にある基肄城址もこの時構築されたものである。

五、六世紀ごろ朝鮮や中国からそれまで見られなかった新しい学問や技術が盛んに伝えられた。主と